

鍛冶の名人を撰び鍛はせたりといへり。されば小立野石引町鑄屋小路の鑄屋鍛冶が名高かりしも、當國の刀鍛冶に鑄をよく鍛へける人なき故なるべし。後世に至りては、鑄など吟味する藩士もなき故に、其の道に名高き鍛冶も出でずと云ふ。平次按するに、金澤町會所留記に載せたる元祿四年閏八月町奉行よりの達書に、當所古着買古金買之内に、不埒成る者有之に付、爲縮石引町鑄屋權兵衛等三人肝煎に申付、右商賈人相改、札を渡し縮爲致候由記載す。右達書にて見れば、鑄屋權兵衛は元祿頃の人なれば、其の父名人なる宇右衛門は、寛文頃などの人なりしこと知られけり。

○奥村氏下邸

此の下邸は、石引町の片原にて、出羽四番町と地続きなりけるに依つて、廢藩の後町名を立て、出羽五番町となしたりといへども、世人は今も奥村家中と呼べり。舊藩中は、奥村氏の家士のみ居住せし故なり。按するに、延寶の金澤圖に、石引町奥村氏元第地をば奥村伊豫下屋敷と記し、前通り百十間五尺とありて、其の隣地をば前田對馬下屋敷と載せたり。又對馬下屋敷の向地をも奥村伊豫下屋敷とな

し、前通り百二間二尺奥行廿九間二尺とあり。是今いふ家中の地なり。

○庄田萬金丹

此の藥は、奥村氏元家中に居住せる庄田氏の傳法にて、高名なる良藥なり。龜尾記に云ふ。奥村内膳の下邸園中に唐人屋敷と云ふ所あり。朝鮮征伐の時擒られたる朝鮮人を、奥村快心入道へ預けられたり。今彼の家士庄田某の家に製する萬金丹は、彼の朝鮮人の傳法なりと云ひ傳へたりとぞ。平次按するに、今庄田氏の傳書には、萬金丹は隨春と云ふ明醫の傳法なり。隨春をヤンチンと呼べりと。此の人如何なる故にや加賀國へ來りけるを、奥村二代河内守榮明へ預けられ、河内守の從士庄田の元祖庄田市佐孝治が家に、從僕と兩人三年寓居し、後武州へ赴き終に歿すと云ふ。武州へ赴きける時、日頃庄田市佐慈意にせし謝禮として、藥方を種々相傳せし中にも、萬金丹は殊に隨春家傳の妙方なりし故に、傳授せし上は隨春家に再び調合致すまじく、庄田の家藥にすべしとなり。隨春の末孫は、江戸幕府の役者小笛庄兵衛なりと云ふ。とあり。おもふに、奥村河

内守榮明は元和六年五月卒すれば、隨春が庄田の家に寓居せしは、文祿・慶長以來の事ならんか。然れば龜尾記に、朝鮮陣の擒の内なりといふ傳説は正説ならん。明の亂を避けて歸化せし人ならんかと云ふ説もあれど、非なるべし。

○村田五香湯

此の藥は、奥村氏元家中に居住せる村田氏の傳法にて、産前産後の妙藥廣岡五香湯の本家なり。村田氏も庄田氏と同じく奥村氏の家士なりしかど、右五香湯の傳法如何なる由緒にて家に傳へたるか、今傳書もなく詳かならず。廣岡五香湯の本家といふ事は、家の傳話に云ふ。昔村田の歴代に幼少にて相續せし者あり。其の者の乳母廣岡村の百姓の娘なり。成長の後乳母の勞を謝せん爲に、家傳の藥方を傳へたり。然るに廣岡の五香湯は、年を逐うて名高く成り、村田五香湯は知る人稀なりしかど、廣岡の本家にて、廣岡へは藥種の内一味省きて相傳すといひ傳へたり。従前は村田氏には看板をも出さず、門の屋根を藁葺となし、是を目あてとなし山里の者尋ね來れる故に、今に至り尙藁葺になしありとなり。

○大音主馬邸跡

石引町通り筋に武士屋敷は、奥村氏と大音氏のみなりしかど、明治廢藩の後退去し、邸跡は町家數戸となりたり。大音氏は家祿四千三百石なり。按するに、改作所舊記に載せたる田井村五郎兵衛より算用場への進達書に、當夏小立野石引町大音主馬殿上屋敷に相渡り、其の替地に田井村高之内地子に下し申儀云々とあり。右は寛文二年九月の事なれば、此の歳の夏居屋敷に渡り、其の以前は地子地にて町家共ありしを、田井村の地内にて替地渡りしと聞ゆ。舊傳に云ふ。此の邸地に、そのかみ幽念寺といへる禪刹ありて、地内に大杉と呼びける巨大の杉樹あり。是寺地なりし時の遺木なりけん。此の地邊卵塔の跡なりといひ傳へたりと。故に大音氏此の邸地に居住中は、毎年七月盆中高燈籠を燈すを家例とせり。右大杉と呼べる老樹は、若し枝にても伐採する時は必ず祟ありとて甚だ恐れ、伐採を禁せしかど、邸地賣却の後遂に伐り取り、今はなしとぞ。

○大音氏下邸

此の邸地は上屋敷の向小路にて、廢藩後は大音町と町名を